

「シーピープラス 2017 (CP+2017)」

神谷 直亮

「シーピープラス 2017 (CP+2017)」が、2月23日から26日まで横浜市のパシフィコ横浜で開催された。主催したカメラ映像機器工業会の発表によれば、出展者は121社・団体で、来場者は66,665人に達したという。この「カメラと写真映像の世界プレミアショー」については、すでに本誌3月号、4月号で触れられているが、本稿では少々観点を改めてレポートを試みることにしたい。

まず、メイン会場では、プロ用的高級カメラから手軽に映像を撮影できるアクションカメラまで、多種多様な製品の展示とデモが行われていた。今回、アクションカメラを出展して競っていたのは、ニコン、リコー、カシオの3社だ。

ニコンは、「Key Mission 360」「同170」「同80」と名付けた3種のアクションカメラの特別コーナーを設けて注目を集めた。「360」は、その名称の通り水平垂直360度にわたって4Kビデオ(24p)や写真の撮影を実現する。ブースでは、このカメラを使って実際に撮影したスカイダイビング、カヌー、ロッククライミングなどの映像を再生して見せ、来場者の興味を誘っていた。「アドベンチャーの大迫力を描き出す」を謳った「170」は、4K(30p)対応の超広角170度ムービーを記録できる。「80」は、広角80度25mm相当の

カメラであるが、タフボディ(防水、防塵、耐衝撃性能)を誇っている。

リコーは、昨年に引き続いて、ワンショットで360度ライブビュー撮影ができる「シータ(Theta)」の売込みを熱心に行っていた。2種類そろえており、スタンダードモデルの「シータSC」は、フルHD 30pで最長5分、ハイスpekモデルの「シータS」は、フルHD 30pで最長25分の動画撮影ができる。メモリーの容量と出力画素については、8GB、1400万相当と説明していた。また、ブースには、撮影した映像を「Stealth VR」ビューワーで試遊するコーナーが設けられており、希望者が列を作っていた。

カシオは、2種のアウトドアレコーダー「EX-FR200」「EX-FR110H」と2種のアクティブセルフィー「EX-FR100L」「EX-FR100」を出展した。「FR200」は、円周魚眼13.4mmレンズを搭載しており、空間を4Kムービーで丸ごと記録できる全天周モデルである。この展示コーナーでは、「さあ、遊びまくれ」を旗印に掲げて、トレッキング、スノーボード、カヌー、スキーゲルキングなどの実写映像が披露されていた。間もなく発売予定という「FR-100L」は、超広角16mmレンズを搭載し、自分スタイルの撮り方がいろいろできるという。ブ

ースでは、脚を画面のガイドに合わせて撮影するだけで、立ち姿でも座り姿でも、ファッションモデルのような美脚写真を簡単に撮るデモが行われており、若い女性たちの人气的になっていた。ブースのカメラマンは、「レンズ効果で、上から撮ることで小顔美人に仕上げることが可能」と語っていた。

次いで、プロ用のカメラの最高峰として紹介されたのは、キヤノンの「Cinema EOS System 8K」の試作機であった。説明員によれば、「スーパー35mm相当サイズのCMOSセンサーを搭載しHDRに対応している。EFシネマレンズを使用できる設計になっているのも特色」とのことであった。この8Kカメラに関連して、同社のブースでは、8K 30インチHDRモニターの試作機2台による再生デモも行われており、専門家の耳目を集めていた。その内の1台で再生されたのは、既述の8Kカメラの試作機ですでに撮影された映像であった。発売の見通しを説明員に聞いてみたが、カメラについてもモニターについても明確な回答が得られなかった。製品としては完成しているようであったが、まだ8Kのマーケットが拡大していないのが課題と思われた。8Kは別格として、今回、キヤノンのブースで目を引いたのは、今年4月上旬に発売するという高性能ミラーレスカメラ「EOS M6」である。「EOS M3」の後継機という位置づけで、画像エンジン「DIGIC 7」を搭載し、AF固定連続撮影速度を最高4.2コマ/秒から9コマ/秒に高速化している。また、着脱可能な電子ビューファインダー「EVF-DC2」(236万ドット有機ELパネル仕様)を、シーンによって外付けして使用することができる。ブースの説明員は、「画像エンジンの性能アップの他に、独自の高速・高精度デュアルピクセルCMOS AFを搭載しているのと、常用最高感度を



写真1 ニコンは、「Key Mission 360」「同170」「同80」と名付けた3種のアクションカメラの特別コーナーを設けて注目を集めた。



写真2 リコーは、昨年に引き続いて、ワンショットで360度ライブビュー撮影ができる「シータ(Theta)」の売込みを熱心に行っていた。

ISO12800 から 25600 に向上させているのが M6 の特色」と語っていた。なお、今年、この「EOS M6」は、レンズ交換式カメラ部門のグランプリに輝いた。

パナソニックは、間もなく発売を控えたハイエンド・ハイブリッド・ミラーレス一眼カメラ「LUMIX GH5」を前面に押し出し、「世界初の 4K/60p 動画記録を実現した。4:2:2 10bit 4K/30p 動画記録も対応する」と PR に余念がなかった。技術的な面では、アップデートしたライブ MOS センサー、ヴィーナスエンジン、DFD テクノロジーによる高速 AF などを挙げていた。発売の時期を聞いてみたら「3月23日の予定」と答えていた。

ソニーは、「α7R II」「α7S II」「α7 II」をブースの前面に並べて来場者の注目を集めた。「α7S II」については、昨年12月に国産 H-2A ロケットで種子島宇宙センターから打ち上げられた「コウノトリ 6号」で国際宇宙ステーションに運ばれ、現在、宇宙からの撮影に使われていると PR していた。これを裏付けるために、ブースには宇宙仕様の実機が展示され、多くの来場者が足を止めて見入る姿が見られた。

富士フィルムは、「CP+」終了直後の2月28日に発売開始となるミラーレスカメラ「GFX 50S」の熱心な売り込みを行っていた。Xシリーズの最上位機種で、G フォーマットイメージセンサーを搭載している。レンズに関しては、搭載可能な「GF63mm F2.8 R WR」「GF32-64mm F4 R LM WR」「GF120mm F4 LM OIS WR Macro」の3本を紹介した。

オリンパスは、昨年末に発売した「OM-D E-M1 Mark II」の売込みに余念がなかった。ブースの説明員は、「特色は、121点オールクロス像面位相差 AF システムと高い追従性」と説明していた。つまり、不規則な動きをする被写体を一層的に捉えること



写真3 ソニーは、昨年12月に国産 H-2A ロケットで国際宇宙ステーションに運ばれ、現在、撮影に使われているという「α7S II」の宇宙版カメラを展示して来場者の耳目を集めた。

ができる性能を意味している。

さらに、メイン展示会場に加えて、今回は、パシフィコ横浜会議室センターを使って「プロ向け動画エリア」が特設されていた。

このエリアの変わり種は、写真・映像撮影用レンタルスタジオを運営しているというスタジオエビスのブースであった。同社の他にフロンティアファクトリーとよしみカメラが詰めていて、フロンティアファクトリーは、アメリカの 360 Fly 社の 360 度 VR 対応アクションカメラ「360fly 4K」を紹介した。水平 360 度 x 垂直 240 度の超ワイドアングルレンズを一つだけ搭載した非常にシンプルな球体カメラ（直径 61mm、重量 172g）である。一方のよしみカメラは、360 度ビデオ撮影システム「iZugra Z4XL」を披露して注目を集めた。

キヤノンは、「C700」をメインにして売り込みを行った。4K 60p 内部記録、4K 120p RAW 出力を実現する CINEMA EOS カメラのフラッグシップモデルである。EF マウントモデルは、昨年末に発売を開始しており、GS PL マウントモデルについては発売日が未定という。

ソニーは、今年1月に発売したばかりの XDCAM メモリーカムコーダー「PXW-FS7」と「PXW-FS5」を目玉にしていた。「FS7」は、4K Super 35mm Exmor 単板 CMOS イメージセンサーと電子式可変



写真4 フロンティアファクトリーは、珍しいアメリカの 360Fly 社の 360 度 VR 対応アクションカメラ「360fly 4K」を紹介した。

ND フィルターを搭載している。同社が開発した革新のデバイスという可変 ND フィルターは、レンズ絞り固定で電子制御により 1/4 から 1/128ND までシームレスに濃度変更を実現する。

パナソニックは、小型・軽量・フリースタイル運用に加えて、IP ネットワーク連携に対応する「POV CAM」を出展して意表を突いた。メモリーカード・ポータブルレコーダー「AG-UMR20」に専用のコンパクトカメラヘッド「AG-UCK20」を併用してシステムを組むという前提での説明であった。特色としては、「IP コントロール & IP ストリーミング」による高い運用性と 4K 30p 映像制作に対応している点が挙げられる。

ブラックマジックデザインは、同社の URSA Mini 4.6K カメラを Freely 社製のジンバルに搭載して出展して来場者の目を引いた。

RED カメラの取り扱いで知られている RAID もブースを構えており、今回新製品の「RED Weapon 8K S35」を出展しているだろうと期待して覗き込んでみたが、残念ながら持ち込んでおらず、代わりに「SCARLET-W 5K」のモノクロ版を披露して意表を突いていた。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディアジャーナリスト